

## 子育て・親育ち支援活動の実際と課題

—ベビープログラム (BP) からファシリテーターとしての役割を考える—

寶川 雅子 (初等教育学科)

### Child-Rearing and Parent-Nurturing Support: The Current Situation and Challenges

Masako Houkawa

Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

#### Abstract

This study considers the role of supporters providing child-rearing assistance. In particular, the role of facilitators in baby programs (BP)—a child-rearing support program devised in Japan—was examined. The study found that, rather than thinking of the program only in terms of the here and now, when interacting with participants, it is important for facilitators to believe in the program participants' capabilities and quietly provide support. This will ensure that the participants will continue to support each other after the completion of the program, and ensure that the program does not simply conclude with the facilitator feeling self-satisfied with his or her unidirectional interaction with participants.

Key words: baby program (BP), facilitator, kuroko (behind-the-scenes person)

キーワード：ベビープログラム (BP)、ファシリテーター、黒子

#### <はじめに>

ノーバディーズ・パーフェクト、トリプル P、コモンセンス・ペアレンティング等、子育て・親育ちを支援するプログラムが多数存在する。子育て・親育ち支援プログラムを実施したから、それで子育ての不安や悩み、子ども虐待が完全に無くなるというわけではないが、現代日本の子育て環境 (核家族化、孤立化等)、子育てをする者の状況 (子育てをする者自身が少子化の中で育ち、経験のないまま子どもを育てている状況等) を考えた場合、これらプログラムの必要性が理解してい

ただけであろう<sup>1) 2)</sup>。また、ノーバディーズ・パーフェクト、トリプル P、ベビープログラム (BP) の効果については、寶川が報告している<sup>1) 2)</sup>。

それぞれのプログラムには、専門的なトレーニングを積み、資格を持ったプログラムの進行役であるファシリテーターが居り、ファシリテーターによってプログラムが進められる。構造化されているプログラムは、プログラムの進め方やファシリテーターの役割などすべて決められているのだが、どんなに構造化されていても、担当をするファシリテーターによってプログラムの雰囲気が不思議

議と異なるのである。

本稿では、プログラムの進行役であるファシリテーターに焦点を当て、ファシリテーターとしての役割、支援者としての役割について考えていきたい。特に、日本で開発されたベビープログラム（以下BPとする）、これは、産後早期から赤ちゃんと共に参加ができるプログラムであるが、このBPを実施するファシリテーターの役割について考えていきたい。

### <本稿の目的>

どんなに構造化されているプログラムでも、プログラムを実施する者（BPでは、ファシリテーターと呼ぶ）によって、プログラムの雰囲気が大きく左右される。

BPは、4つのセッションで1プログラムとされている。ファシリテーターと参加者は、1週間間隔で継続して1か月間のかかわりを持つことになる。1か月の間、ファシリテーターは、参加者や参加者の子育てに少なからず影響し続けることになるわけである。そのため、ファシリテーターの持つ雰囲気、参加者に対することばのかけ方、声のトーン、話すスピード、表情、しぐさ、視線、立居振舞等、ファシリテーターの様々な部分がプログラム全体にかかわってくることになる。

BPファシリテーターの研修では、“ファシリテーターは黒子に徹する”とアドバイスを受けるが、なぜ、黒子に徹する必要があるのか、BPの目標を達成するために、参加者が参加をして良かったと感じ、子育てへの不安を少しでも軽減してBPを終了していただくためには、ファシリテーターは何に配慮をすべきなのか、本稿では、BP実施におけるファシリテーターの役割について、主に、日本BPプログラムセンター（BPJ）のBPファシリテーター・ガイド（第2版）<sup>3)</sup>に加え、著者のファシリテーターとしての実践を通して具体的に考えていきたい。

倫理的配慮として、鎌倉女子大学研究倫理委員会の承認を得ている（承認番号：鎌倫—14003）。

### <BP誕生の経緯>

BPは、カナダ州政府が考案した親支援プログラム「ノーバディーズ・パーフェクト（Nobody's Perfect 完璧な親なんていない!）」の実践の中から、日本の文化と子育ての現状を踏まえて日本で考案されたプログラムである。NPO法人こころの子育てインターネット関西が制作し、2011年2月からプログラムの実践が始まった。

Nobody's Perfectは、親参加型の親教育プログラムであり、親が親として育つこと（親としての役割を担えること）をサポートしてくれるプログラムなのである。これは、少子化時代に生まれ育ち、子どもとかかわる機会を持たないままわが子を産み育てなければならぬ厳しい環境に置かれている現代の親に、ふさわしいプログラムともいえる。Nobody's Perfectは、0歳から就学前の子どもを育てている親を対象としたプログラムである。親参加型の体験を通したプログラムであり、参加者からの体験を通してお互い学び合うわけである。この中で、0歳の子どもを持つ親、しかも、初めて子育てを行っている親は、1歳や2歳以上の子どもを持つ親の体験を聴いても、そのような体験はまだしていないので、どうしても話に入っていくことができない。折角参加をしたが、聞き役で終わってしまうという残念な状況を生み出してしまうことも少なくないことがわかってきた。また、0歳の子どもを育てている親ならではの悩みがあることもわかってきた。この状況を踏まえ、初めて0歳の子どもを育てている親を対象としたプログラムの必要性を感じ、BPが誕生したわけである。

### <BPの目標>

BPの目標は、現代日本の子育て家庭が抱えている問題点を踏まえて目標が定められている。子育ての問題点とは、①核家族化や家族の孤立化、②子育ての体験不足や育児知識の不足、③親の育児不安やストレス、そして、それらがきっかけとなって発生する子ども虐待などの様々な事件や問題のことである<sup>3) 4) 5) 6)</sup>。このような現代の子育ての問題を踏まえ、BPでは、①0歳時期からの子育て仲間づくり、②少し先を見通した子育て知識

の提供、③親の不安の軽減と心身の安定 を目標にしている。これら3つの目標は、「子どもの心の安定根づくり」「親子の絆づくり」として、BP がめざすものなのである。

ここでいう「子育て仲間」とは、子育てサークルを作るとか、子育てグループをつくるという意味だけではなく、気兼ねなく子育てについて話し、相談ができる仲間のことである。そうすることで、お互いの育児を学び合える、ピア・レビューできる仲間づくりのことをBP では意味しているのである。

### <BP の枠組み>

BP の枠組みは、以下のように決められている。

対象者：第1子とその母親

プログラムへの参加人数：5組～20組 (BP は、母と子一緒にプログラムに参加をする)

プログラムのタイプ：BP には、2つのタイプがある。

前期 (2～5か月児とその母親)

後期 (5～8か月児とその母親)

BP では、前期プログラムを基本プログラムと捉え、後期プログラムは、前期プログラムに参加出来なかった方のサブプログラムという位置づけをしている。

時間：1セッション2時間。後半の30分間は、参加者同士の交流や、専門職等がいる場合は質問の時間になっている。

BP の進行：BP は、資格のあるファシリテーター2名で進行する。参加者10名までならば、資格を持つファシリテーター1名とアシスタント1名で実施も可能である。

### <BP の構造>

BP は構造化されたプログラムである。ファシリテーターは、BP の構造を守り、プログラムを

すすめる必要がある。

前期、後期共にプログラムの構造は、同じである。4つのセッションとも、4部構成となっており、セッション終了前30分が質問・交流時間であるという、大きな枠としては、同じ構造になっているが、各回の構造を見ていくと、1回目のセッション (初回のセッション) と2～4回目のセッションの構造がやや異なっている (表1)。

1回目セッションの構造					
10分	35分	30分	15分	30分	
導入部	お互いを知り合う	お互いの関心ごとを知る	結び	交流・質問タイム	
・あいさつ	・他己紹介	・お互いの関心ごとを知り、対応策を共に考える	・ひとり一言	・自由に交流	
・歓迎	・名礼づくり			・個別質問	
・BPなどの説明	・ルールの確認				
2～4回目セッションの構造					
25分	30分	20分	15分	30分	
導入部	第1部	第2部	結び	交流・質問タイム	
・一人一言	・今日のテーマについて話し合う	・基礎知識の整理	・ひとり一言	・自由に交流	
・親子のふれあい遊び		・基礎知識を聞いての話し合い			・個別質問
・アイスブレイキング		・テキストを読む			
・ルールの確認					

表1:BPの構造 (BPファシリテーターガイド(第2版)を基に著者作成)

### <BP の実施者>

BP の進行役をファシリテーターと呼ぶ。

ファシリテーターになるためには、決められた内容の研修を2日間受講する。研修終了後、一度BPを実際実施する。実施するに当たっては、BPトレーナーの指導を仰ぎながら実施する。BPトレーナーは、BPに精通している者が担当し、初回セッションに向けての心構えや配慮事項等に始まり、各回の実施報告を受けながらBPの目標達成のためにBP実施者をサポートしていくのである。初めてBPを実施する者にとっては、初回セッションからセッション終了、書類の提出等までサポートが受けられるので、心強い味方である。プログラム終了後、報告書等既定の書類を提出し、審査を受ける。認められたものが、BPファシリテーターとしてBPの実施が可能となる (表2)。

表2 BPのファシリテーターとなるための流れ
研修(養成講座)を受ける(2日間)
↓
養成講座を修了した者がBPを実施する(各回のセッション記録をBPTレーナーに提出し、指導を仰ぐ)
↓
報告書等を提出し、審査を受ける
↓
審査で認められたものがBPファシリテーターとなる

### <ファシリテーターとして活動を継続するためのスキルアップ>

BPの場合、ファシリテーターとなった後も、目標が達成されるようなプログラム運営が行えるよう、また、ファシリテーターとしてのスキルアップのために定期的に研修等の機会が設けられている。さらに、BP本部では、ファシリテーターとして質問等があれば、常にサポートできる仕組みになっている。

例えば、ファシリテーターとして活動を始めた直後は、各回のセッション記録を他の規定されている書類と共にBPの本部に提出をすることになっている。これは、プログラムが規定通りに行えているのか、ファシリテートする上で不都合はなかったか等、BP本部でアドバイス・確認を行い、ファシリテーターとしてスタートを切る上での支えとなっている。ファシリテートをし、そのうえでセッション記録を作成することは、楽なことではないが、記録を作成しながら自身のファシリテーターとしての在り方や、反省、参加者の姿、次回セッションに向けての心構え等丁寧に行うことができるため、ファシリテーターとしてのスキルアップに繋がっている。ただし、ファシリテーター自身の“ファシリテーターとして、成長したい”“参加者が参加をして良かったと思えるファシリテーションをしたい。そのためには自分は何にもっと配慮すべきか”という自覚も必要である。

### <ファシリテーターの役割>

BPファシリテーター・ガイド(第2版)によると、BPファシリテーターとは、“BPプログラムの目標達成に向けて、対象となる参加者を募集

し、決められた計画に基づき、プログラムを実施する人のこと”である。BPプログラムの目的を達成するために、BPファシリテーターは、5つの役割が求められている。

① 安全で、安心できる、あたたかい場をつくる力

BPの参加者は、初めて子どもを育てている、2～5か月の赤ちゃんを持つ母親である。赤ちゃんを連れ、必要な荷物の準備をして出かけることだけでも、おそらく、母親にとっては慣れないことで、大変なことであろう。中には、電車やバスに乗って、赤ちゃんがぐずったりすることが心配なので、何十分も、荷物を持ち赤ちゃんを抱いて歩いて来る者もいる。また、BPは、母子一緒に参加をするプログラムであり、授乳やおむつの交換、赤ちゃんをあやすことなども遠慮なくその場で行うことができる。さらに、子育てに関連して様々な個人的な内容に関する話題も参加者から出てくることもある。ファシリテーターには、様々な思いをもって参加をする・参加をしている参加者の思いを理解し、「赤ちゃんを連れて大変だけれど参加をして良かった」「安心して参加ができた」と思ってもらえるような場をつくる力が求められる。

② 参加者と参加者をつなぐ力

BPの目標の一つに「ピア・レビューができる仲間づくり」が挙げられている。そこで、ファシリテーターに求められることは“参加者同士をつなぐ”役割である。第1回目のセッションでは難しいことではあるが、回を重ねていく中で参加者同士が自主的に繋がっていきけるようなファシリテーション力が必要になる。さらに、必要に応じて、参加者と各種相談機関や地域の子育て支援などの社会資源等につなげることも、ファシリテーターの役割となる。

③ 話し合いが進むように、質問や投げかけができる力

話し合いが進むために具体的にどのようにファシリテーションをしていくのかというような、How To的なマニュアルがあるわけではない。各プログラムへの参加者も異なれば、話し合いの内

容も異なる。その場の状況を見極めて、話している内容に深みを持たせたり、参加者皆が発言できるように促したり等、参加者の話し合いが上手く進むように各グループの話し合いの内容や様子を観察し、必要に応じて介入をすることが求められる。

#### ④ 安全面に配慮をする力

ここでの安全は、精神面での安全ではなく、参加をしているお母さんと赤ちゃんが事故やけがの無いように配慮をする意味での安全である。事前準備の時点から、安全面への配慮を行うことで、自己やけがの未然防止につながることになる。また、プログラム実施中に不必要な混乱を生じることが無くなる。そのような、参加者と赤ちゃんの立場に立った安全面への配慮が、ファシリテーターには求められる。

#### ⑤ スムーズに進行できる力

BPは、構造化されたプログラムであるため、各回の1時間30分のセッションの中で行うべきことが明確である。表1でも示したが、4部構成になっており、各部の時間も決められている。ファシリテーターは、1時間30分のセッションを流れるように、各部と各部とのつながりを理解した上で、プログラムを進める必要がある。進行がスムーズであると、参加をした者の集中も途切れにくい。

### <ファシリテーターとしての基本姿勢>

BPを行う上で心がけておきたいファシリテーターとしての基本的姿勢が7つある。これは、ファシリテーションの基本でもある。

BPでは、目標を達成できるファシリテーションを行うために、構造化されたプログラムであっても、ファシリテーターとしての基本的な姿勢についてもわかりやすく、示している。

#### ① 全員が参加をしやすい雰囲気をつくる

ファシリテーターの表情や雰囲気、しぐさ、ことばのかけ方など、要するに、ファシリテーター自身そのものがプログラムの雰囲気に大きく影響を及ぼす。ファシリテーターは、そのことを念頭に置き、一つひとつの言動に配慮する必要がある。

#### ② わかりやすい説明、指示をする

参加者にわかりやすい説明を心がける。そのためは、短く、簡単なことばを選んで説明・支持を行う必要がある。長い説明、専門的なことばが混在しているようなわかりにくい説明はしない。

#### ③ グループ間でコミュニケーションができるように配慮

BPでは、参加者同士をつなぐことがファシリテーターの役割の一つである。ファシリテーターと特定の参加者とでのやりとりにならないよう、グループの参加者同士で話ができるように配慮をする必要がある。また、話したくても、自分から話させないような参加者もいる。そのような場合は、「～さんはどうです？」等、自然に投げかけ、参加者が話し出しやすい環境を作ることも、ファシリテーターとして必要なことである。

#### ④ テーマに沿った話し合いができるように配慮

グループで話し合いを行う際に、テーマから話し合いの内容がそれていないか、話し合いの流れを遮ることのないようにさりげなく確認することも必要である。状況によっては、テーマに沿った話し合いができるよう話し合いの雰囲気や話を乱さないように配慮しながら介入をする。

#### ⑤ 誘導しない

ファシリテーターの何気ない一言が、時として誘導につながることでなりかねない。例えば、「私は～のように思うのですよね。」というように。そのため、ファシリテーターは、自分の言動が参加者に及ぼす影響を良く考える必要がある。

#### ⑥ 参加者が話し出すのを「待つ」

BPでは、参加者が話す機会を設けている。例えば、始めの一言や終わりの一言、参加者同士での話し合いの時間等。これらの時、なかなか話が始まらない場合がある。会場が一瞬静まるので、ファシリテーターとしては、「話が始まらない、どうしようか」と焦る感情がこみ上げる。しかし、すぐにファシリテーターが話し始めず少し「待つ」ことが必要である。この、少し「待つ」ことは、ファシリテーターとしては、「誰も話さない、どうしよう、誰かに話してもらわなければ」と少々戸惑い慌ててしまう場面である。しかし、参加者は、何を話そうか考え中であったり、自分から話

してよいものかどうか悩んでいたりと、時には、質問の意味を考えていたりする。状況を判断し、質問の意味が分からなかったかと考えた場合は、「質問の意味はわかりましたか？」と確認を行えば済むことである。わかっているうえで、発言が無い場合は、まだ「考え中」と判断をし、もう少し、「待つ」ことも必要である。こうする中で、参加者から話し出せれば、参加者が主人公のセッションになっていくであろう。もし、全く話しがでてこないようならば、話してもらえるような方に「どうですか？」と振り、きっかけをつくるという判断も必要である。

#### ⑦ ファシリテーターとして知っておくべき質問の仕方の基本

質問の仕方の基本は5通りある。

- 1) 大きな質問から小さな質問へ
- 2) 話すことが苦手であったり緊張が高い参加者への質問
- 3) 話し合いを活性化したい場合の質問
- 4) 話を掘り下げるための質問
- 5) 限定された人だけではなく、他の人の考えを引き出す質問

ファシリテーターは、BPの目標を達成するために、話し合いの状況に応じて参加者への質問の仕方にも工夫を加え、プログラムの質を保ちながら参加者同士がつながり合い学び合えるような配慮が必要である。

#### <“黒子になる”意味を考える（ファシリテーターの自己満足で終わらないために）>

これまで、BPファシリテーターについて、役割や基本姿勢など、BPを統括している日本BPプログラムセンターの考えに従って述べてきた。これらを理解しているうえで、BPを実践していくわけである。述べられていることは、最もなことで、BPを実施するためには大切なことである。しかし、理解していることと、実践に生かせることは異なる場合もある。ファシリテーターの研修を受け、ファシリテーターとしてのトレーニングを積み、ファシリテーター用のガイドブックを読んで、ファシリテーターとしての役割を理解し

ていても、実際に出会う参加者の様子を見極め、学んだ何を今の状況に適用してセッションを進めていくことが参加者にとって最善なのかを限られた時間の中で判断をし、実践に移すことは、簡単なことではない。それは、ファシリテーターとなる者にも、その人各人のファシリテーターになりたいと決断するに至る思いがあり、これまでの人生がある。あるいは、仕事を持っている者ならば、仕事の内容による経験も影響するかもしれない。そのような人生背景、生活背景を背負ってファシリテーターとなるのである。そのため、どんなにファシリテーターとしての役割や姿勢を理解していたとしても、目の前で起こっている出来事に対処する場合、どうしても、ファシリテーターの人生・生活経験が少なからず影響してしまうのである。どんなに構造化されたプログラムであっても、ファシリテーターという人そのものが、プログラムに影響し、参加者へも影響をしていることをファシリテーター自身が自覚していなければ、ファシリテーターの「BPを実施した」という単なる自己満足で終わってしまう危険も含んでいる。ファシリテーターは、“BPの目標を達成するために自分は何をすべきか”という意識を決して忘れてはならない。

BPファシリテーターの研修を行う中で、ファシリテーターは“黒子”に徹することを学ぶ。この場合の“黒子”という意味は、「プログラムの主人公は参加者、参加者が主人公と思えるような環境・流れを作ることがファシリテーターの役割」という考え方が相応しいであろう。

以下に一般的な例を挙げて具体的に考えていきたい。

例1：セッションの途中であるお母さんがお手洗いにいきたくなくなったようである。しかし、赤ちゃんがいるので、どうしようかなあと周囲を見回しながら考えているようである。

BPでは、このような場面に良く出会う。参加者の、このような状況にファシリテーターが気付くと、「赤ちゃんを見ているので、安心して行って来て下さいね。」と声をかけ、ファシリテーター

自身がお母さんとかかわりを持とうとしてしまう気持ちを抱く。自分で何とかしよう、助けたいという善意から来る行為なのであろう。

BP の目標の一つに、「0 歳児期からの子育てなにかまづくり」がある。また、ファシリテーターは、黒子としての役割を担っている。このような BP の考え方に従って例 1 を改めて考えてみたい。まず、このお母さんは、周囲を見回しているのである。ということは、もしかしたら、同じ参加者に助けを求めようとしているのかもしれないし、本当に、どうしようかと困っているのかもしれない。ファシリテーターは、もう少し、様子を見守るべきであろう。なぜなら、お母さんは他の参加者に自ら声をかけて助けを求めるかもしれないからである。つまり、このお母さんは、困りごとを自ら社会に向けて発信し、助けを求める力のある人かもしれないのである。仮にファシリテーターが、このお母さんの行為よりも先に声をかけてしまったら、お母さんが本来持っているこのような力の芽を摘んでしまいかねない。また、お母さんが他の参加者に自ら声をかけることで、参加者同士のつながりを作るきっかけになる可能性を充分に持っている。これは、BP が終了してからも地域での子育て仲間を作るきっかけになってくるかも知れない。

ファシリテーターが声掛けのタイミングを考慮することで、長い目で見た子育て支援が可能となる。もし、お母さんとファシリテーターとのやりとりだけになっていたら、その場限りの支援であり、その後は何も残らない。これでは参加者のための支援に繋がらない。単に、ファシリテーターの「してあげた」という自己満足で終わってしまう。

参加者が用を済ますために一時的にその場を離れようとするよくある場面であっても、BP の目標、ファシリテーターの役割、長期的に見て今、自分は何をすべきかを冷静に考え判断して立ち居振る舞うことで、よくある場面にも、子育て支援の意義を見出すことができるのである。

どのような時でも、主人公はお母さんである。ファシリテーターは、“黒子” に徹するべきであ

る。

例 2：参加者 20 組、ファシリテーター 2 人 (A さん、B さん) でプログラムを実施している。最初の一人一言は、A さんが担当し、B さんはサポート役であった。B さんは、円になって座っている参加者の後方で、参加者の一言を忘れないようメモを取ることに集中している。

メモを取っているのは、サポート役のファシリテーターなので、特に差支えないのではないかという考えもある。B さんは、参加者の一人一人の気持ちを確実に理解し、自分が進行役になった場合の役に立てようという考えがあつての行為かもしれない。しかし、B さんは、自分のことしか考えていない。参加者の立場で、この場面を考えてみたい。参加者から見ると、ファシリテーターは 2 名なのである。そのファシリテーターが参加者の話しに耳を傾けず、メモを取ることに夢中であることは、参加者としては、自分の話しを聞いてもらえないという残念な気持ち、話していることを記録されているという警戒心からくる不安を感じずにはいられないであろう。そもそも BP は、参加者に安心して何でも話せる場を提供するプログラムである。ところが、ファシリテーターがメモを夢中でとっている姿一つで、参加者は、メモに残されては困るような事柄は話さず、差支えないことしか話さなくなる可能性もある。これでは、BP 本来の目的をファシリテーター自ら阻んでいることになる。サポート役であってもファシリテーターはファシリテーターである。ファシリテーターの存在そのものが、プログラムに影響することを自覚し、どのような時にも、参加者にとって安心できる環境づくりに配慮する必要がある。進行役でないサポート役のファシリテーターだからこそ、“黒子” としてより参加者に寄り添うことが出来るのではないだろうか。

<子育て・親育ちを“支援する”ことの意味(むすびにかえて)>

“支援する”とは、本来どのようなことなのだ

ろうか。例えば、ある子育て支援イベントの会場に、母親が赤ちゃんを抱っこし、荷物をもって来場したとする。お母さんの荷物が重そうなので、ある支援者が「荷物は、ここに持って行きますね。」と荷物置き場に荷物を移動したとする。この行為は、支援なのであろうか？支援者は、お母さんの姿から大変さを察し、良かれと思って先回りをして荷物を運んだのであろう。しかし、この行為には、お母さんの考えは一切反映されていない。もしかしたらお母さんは、自分で支度をしたかったのかもしれないし、支援者が行ったようにして欲しかったのかもしれない。それは、お母さん本人に尋ね、どうしてほしいのかを確認しなければわからない。赤ちゃんを抱えて支度が大変そうなお母さんの意向に沿ったサポートが出来て初めて“支援している”と言えるのではないだろうか？

“支援”というとき、支援をする者から支援を受ける者への一方通行的なかかわり、つまり、“してあげる”“やってあげる”的ななかかわりになりがちである。“してあげる”“やってあげる”的ななかかわりの主人公は支援者であり、支援者の考えを、支援を受ける者に押しつけていることになりかねない。本来は、支援を受ける者が主人公となるべきなのである。原田<sup>7)</sup>は、親と支援者との関係を「親を運転席に！支援職は助手席に！」という言葉で表現している。これは、カナダの家族支援のモットーでもある。子育て支援において、親をお客さん扱いする支援を子育て支援とするのではなく、親が主体となって行われている活動を支援していくことが本来の子育て支援であるということなのである。

支援とは、支援を受ける者自らが持つ力を信じ、思いに寄り添い、必要に応じてさりげなく手を差し伸べることであろう。BPの場合、ファシリテーターが何でもお世話をしてしまうのではなく、さり気ない言葉かけなどにより、参加者同士が繋がっていく機会を作り、BPが終了したのちまでもお互いにかかわりが持てるよう、見通しをもった配慮をすることではないだろうか。まさに“黒子”に徹することなのである。主人公は、支援を受ける者なのだ。

#### 引用・参考文献等

- 1). 児童虐待防止のための子育て支援プログラムについて 寶川雅子 鎌倉女子大学紀要 第21号 93-100頁 2014年3月
- 2). 早期虐待予防を目的とした子育て支援プログラムについて—親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんが来た！”の実施かわかる参加者への効果— 寶川雅子 鎌倉女子大学紀要 第22号 51-59頁 2015年3月
- 3). 親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんが来た！”—解説とすすめかた—BPファシリテーター・ガイド(第2版) 編集NPO法人こころの子育てインテナーねっと関西(KKI) 2012年11月17日
- 4). 乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点— 服部祥子・原田正文 名古屋大学出版会 1991年
- 5). 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防— 原田正文 名古屋大学出版会 2006年
- 6). 育児不安を超えて—思春期に花開く子育て— 原田正文 朱鷺書房 1993年
- 7). 子育て支援とNPO 原田正文 朱鷺書房 25頁 2007年8月20日

#### 要旨

本稿では、子育てを支援する支援者について、その役割を考察した。なかでも、日本で考案された子育て支援プログラム、ベビープログラム(BP)のファシリテーターとしての役割について考察を行った。ファシリテーターは、プログラムの今だけを考えて参加者とかかわりを持つのではなく、参加者自身が持つ力を信じ、プログラムが終了したのちも参加者同士が支え合えるような見通しをもって、さりげなく援助すること、ファシリテーターの一方的なかかわりによる自己満足で終わることが無いよう十分配慮することなどが大切であるとわかった。

(2015年9月30日受稿)